

「ミュアヘッド・フィールズの過去、現在、未来（その9）」

2023年9月

ブリック&ウッドクラブ理事会

（文責：中島健一郎）

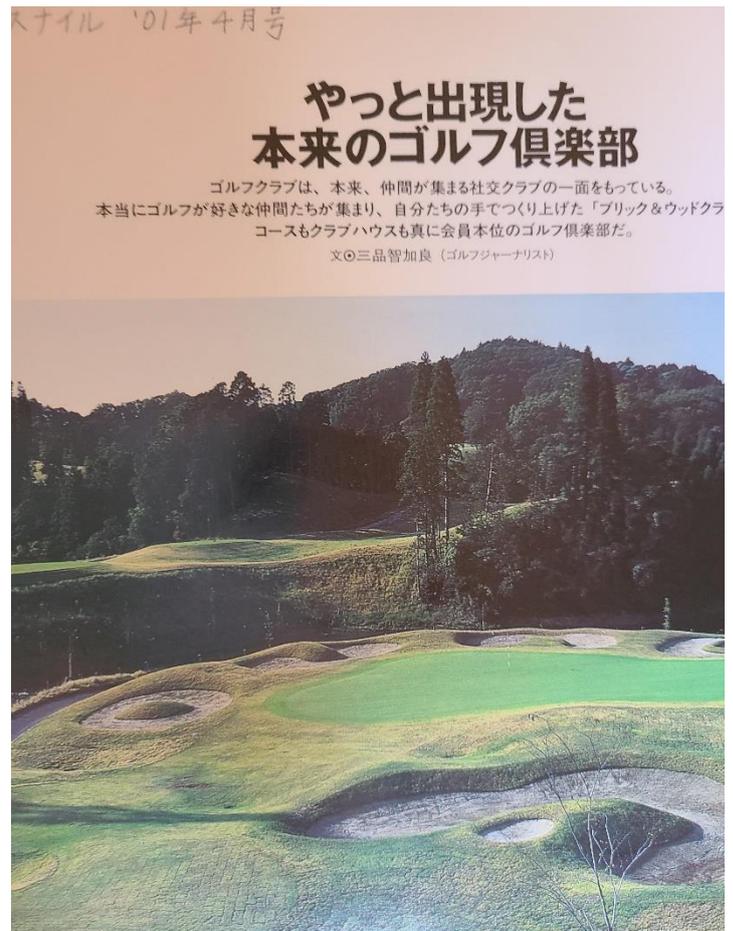
ブリック&ウッドクラブ（BWC）が2000年にオープンしてから、どのくらいメディアに取り上げられてきたのだろうかと思ってスタッフの原田さんに聞いたら「ファイルしてありますよ。」と積み重ねると30センチにもなるファイル7冊を出してくれた。

主なものは知っているつもりだったが「こんなにあるとは。」と驚いた。抱えて家に持ち帰り読み始めたらとても面白く懐かしい。忘れていたことを思い出させてくれた。BWCそして土太郎村の歴史を知るために古くからのメンバーや最近入会したメンバーの皆さんに紹介したいと思い、各記事のさわり（さわりというのは話の最初の部分という意味ではなく核心部分というのが本来の意味です。念のため。）を書いていく。

1. 開場の頃の様子

まず2001年6月2日号の週刊新潮。スポーツ実況放送で有名な元NHKアナウンサーの島村俊治さん（オープン当初からのメンバー。NHKがPGAツアーをBSで放送を開始した当初からのキャスターで、佐渡充高さんとのコンビネーションが秀逸でした。）が打撃の神様川上哲治氏とBWCでラウンドした時の話を載せている。

「なまなかなお方でない」川上氏が「なまなかではないゴルフ場」でプレー。日本で恐らく唯一しかないスタイルのコース。フェアウェーのうねり、グリーンの速さ、アメリカでプレーするのと同じ難しさだ。勝負は世界のドン勝ち。「勝負にはならんな。ウワッハッハア。」



島村さんはBWCで毎年大コンペを主催され、オリンピック放送の裏話などの講演もされるなど、その語り口は楽しい。現在も J-Sports で大リーグ放送を担当されることもありご活躍だ。

次はプロ漫画家ゴルファー有羽鳥パー子氏がアルバ01年6月28日に書いた「ゴルフ観察日記 パー子は見た!」。長くなるが引用しよう。

常々このコラムでも叫び続けてきたように、ゴルフ場のシステムというものに違和感を感じていた。くそ暑い真夏でもジャケット着用を義務付け、娯楽だということとことん堅苦しい服装規制、無意味に華美なクラブハウス、必要なくてもセットでついてくるキャディー、1日がかりのプレーに食い過ぎろと言わんばかりの昼食メニュー、挙句の果てが経営に行き詰まり、格安ビジターを呼び集め、メンバーから非難を浴びる。しかし、そのゴルフ場（ブリック&ウッドクラブ）は全く正反対の、まさにゴルファーのためのゴルフ場なのだ。

パー子さんの鋭い視点と、お褒めの言葉が「うん、うん」と嬉しくなる。

2001年4月号の「ナイルスナイル」にはゴルフジャーナリストの三品智加良さんが「やっと出現した本来のゴルフ倶楽部」と題した一文を寄せている。三品さんはBWCの創設に参画し貢献した人だ。三品さんの文章も引用する。

世界で最初のゴルフ倶楽部は 1744 年に設立されたスコットランドのザ・オナラブル・カンパニー・オブ・エディンバラ・ゴルファーズである。(中略)決して堅苦しいものではなかったようである。そしてゴルフの後は酒を飲んでわいわい騒ごうよ、という主旨だったのではないだろうか？(中略)ブリック&ウッドクラブは最初から株主会員制を採用、まさに気の合ったゴルフ仲間が集まって設立された。(中略)コースもクラブハウス建設も会員のみみんなの総意で進めた。自分達でできるものは自分達で造っていくというのを基本としている。(中略)週末ともなると、ゴルフ仲間達が集まり、夜遅くまでパーティーだ。お酒を飲みながら、ゴルフ談義、人生談義、様々である。これが実に楽しそうだ。ゴルフの後にこれだけ楽しく過ごしているプレーヤーを見るのは久しぶりのような気がする。もちろん日本では見たことがない。(中略)日本にゴルフが伝来して百年となるが、百年にしてやっと本来のゴルフ倶楽部が出現したと言って過言ではないのではないか。

三品さんと同様の感想をゴルフジャーナリスト田野辺薫氏が「愉しむゴルフ」（2003年11月7日）に書いている。

平成12年、千葉県市原市に「アフターゴルフこそクラブライフだ」と標榜するブリック&ウッドクラブが誕生。メンバーの滞在時間はプレー時間の2倍平均だということから、酒を飲み交わしながらの楽しみがたっぷりあるわけだ。仮眠所もあれば、宿泊のためのトレーラーハウスまで、用意万端。新しいクラブ社会が生まれようとしている。クラブライフを通じて知り合ったカップルも生まれよう。欧米では珍しくない話だ。

確かに中島が知る範囲で6組のカップルが誕生し、レストラン棟で華燭の宴が盛大に行われた。その6組とも今も仲良く、うらやましい限りだ。

いつ書かかれたか不詳だが、鈴木康之氏の「ゴルフ建設学」第14章には「いかがでしたか」「堪能されましたか」「またいらっしゃって下さい」とメンバーが見慣れぬ顔のゲストで来ている人に声をかけるゴルフ場としてブリック&ウッドクラブは紹介されている。多士オタの発起人たちがロコミで集めた気の合うメンバーは各委員会に所属してクラブを盛り上げる。だから「名門クラブのジャケットが勢揃いするパーティーと好対照なカジュアルなメンバーの働きに支えられたグラウンドオープン（2001年9月2日）」と鈴木氏はBWCに驚き「翌朝にはゴミ袋を運んで片付けているTシャツ組」に感激している。そして「子どもたちや孫たちに、お父さん、おじいちゃん、いいものを遺してくれたねと言われたい。」と坂征郎さんの言葉を紹介している。

2000年7月6日号の週刊新潮。森本毅郎さん（キャスター）の「私の週間食卓日記」にBWCが登場した。

毎日新聞中島健一郎氏の役員昇進を祝ってゴルフ。千葉に新しく出来た「ブリック&ウッドクラブ」に3組が終結。朝食はゴルフ場に向かう車の中で、女房手製のジャコ入り握り飯を頬張る。昼はゴルフ場売店のツナサンドとコーラを立ち食い、そのままスループレー。カートで気楽にまわるアメリカンスタイルが心地よい。ラウンド後、クラブハウスのテラスでお祝いの会食。豚の角煮とろろ掛け、スペアリブ、小籠包、トマトサラダなどの皿をつまむ。

森本さんは声の良さとしゃべりの絶妙さにいつも感服したが、ゴルフも大好きで上手。

放送が終わると、時々、富士山が見える裾野カントリーにアナウンサーの遠藤康子さんと車を走らせる。5年間水曜日のコメンテーターをした僕もお供したものだ。懐かしい。さて、GOLF CLASSIC (2002年1月号)はジャパンコースランキングを発表した。最も素晴らしいパー3ホールとしてBWCの3番が8位となったが、大きな写真付きで紹介されたのはそのBWCの3番だった。

フルバックのティに立つと、約20メートルの打ち下ろしになるゆえ、全体がよく見え、両サイドのハザードに挟まれたグリーンが浮き上がって見える。しかも3段グリーンのアンジュレーションまでもよく見える。なかなかのプレッシャーである。チャレンジ意欲のわく名ホールといえるのではないだろうか？設計は鬼才、デズモンド・ミュアヘッド氏。シンボルを設計に取り込む手法は、難易度まで左右する。グリーンを外すと悔しくて、夢でもうなされそうなホールである。

フルバックだけでなく、青ティ、白ティ、赤ティでもチャレンジングな3番ショートはBWCのメンバーにとって面白い。グリーンに乗ったかという僕のナイスショットがグリーンエッジに落ち、右に跳ねて下のバンカーに落ちたらさあ大変。バンカー脱出に何打も叩き、上がったら9打というスコアに泣くことが多いのだった。

ゴルフ場セミナーの誌面では「メンバーライフが充実している副産物 トレーラーハウスのあるゴルフ場」とBWCを紹介している。

「プレー後の親睦で、飲むメンバーが多いから泊まる施設が欲しいという声に応じてアメリカから1台6000ドルで計6台購入した。」と坂征郎代表が説明。取材当日も18時すぎ、メンバーズラウンジで歓談していた1人がスタッフに「今日、トレーラー空いている？家族で泊まるからよろしく。今晚は獅子座流星群だから、澄んだここで見るよ。」と予約した光景を書き込んでいる。

2002年5月3日、BWCのコンセプトやコース設計で多大な貢献をしてくれたデズモンド・ミュアヘッド氏がカリフォルニア州のニューポートビーチで亡くなられた。享年79。亡くなる2年前にオープンしたBWCは彼の最後の作品、遺作となった。

「ゴルフクラシック」(2002年9月号)に三品智加良氏がミュアヘッド氏の死を悼む一文を寄せているので全文を紹介したい。

ジャック・ニクラウスと共同設計の作品、米国オハイオ州のミュアフィールドヴィレッジを発表したときは、米国のゴルフ界も一斉に注目した。それ以外にもパームスプリングのミッションヒルズ、デザートアイランドなどを手掛けており、住宅と融合させ

たゴルフリゾートの開発でも注目されていた。その後、病気で倒れ10年後に復活。そのときに発表し、全米をアッといわせたのが、フロリダのアバディーンとフィラデルフィアのストーンハーバーだった。ゴルフをいかに楽しくラウンドできるかということをも命題にアート、つまりさまざまなテーマのモチーフをコース設計に盛り込むことを発表したからである。そのあと日本でも、このシンボル型の設計を発表して話題となった。それがセゴビア、若木、富士中央、新陽、オークビレッジである。それぞれ、スペイン、セントアンドリュース、富士山、イングランドなどをテーマにした。葛飾北斎の富士山をパー3に描いた富士中央の造形は、何ともいえない味わいがある。そして日本最後の作品になったのが、ブリック&ウッドである。シンボリックスタイルとヒストリカルスタイルの両方を取り入れた傑作だった。彼は、常にゴルフコースとの会話をプレーヤーに求めている。ゴルフのプレーの楽しさとコース設計者との会話で、楽しいゴルフをゴルファーに期待していたのだ。彼が亡くなっても、彼の設計は永遠に生き続ける。たまには彼の設計コースに行って、彼との会話を楽しみたいと思う。合掌・・・

2. 家族で楽しむ場所

2002年5月3日号の週刊朝日は「本誌推奨夫婦で楽しむ全国ゴルフ場85選」という記事にまずBWCを取り上げている。

通訳の仕事をしている都内在住の澄田美都子さんは休暇を過ごすハワイでまとめてゴルフするくらいだったが、このところ月に1、2度はブリック&ウッドクラブに商社勤務の夫と通っている。「直前に予約しても大丈夫なことが多いし、2人だけで回らせてくれるので、とても気に入っています。」という。

細田パパと愛称で呼ばれているCS放送の細田泰社長も友人に誘われて夫婦でブリック&ウッドクラブに入会した。ソニー勤務時代は米国やパナマなどを転々としたが「接待ゴルフは日本に特異な現象です。海外ではゴルフ接待したことはありません。気の合う人間とリラックスしてやるのが良い。」と妻や娘夫婦とプレーを楽しんでいる。昨年ゴルファー意識調査では主なラウンド相手に「夫や妻」と答えた人は14.9%で4年前の2倍に増えたという。

BWCが「ゴルフ場は家族で楽しむスペース」と位置付けていることも紹介されている。

敷地にはテニスコート、近くには乗馬クラブがあり、驚いたのは、幼い子が遊べる「キッズルーム」まで用意されていたことだと述べている。「事前の予約があれば、ベビーシッターも用意できます。」と子どもが出来てゴルフから縁遠くなる女性への配慮のフロントの声はなかなかのものだ。

3. ゴルフだけでない楽しみ

雑誌BRIO2003年3月号にはBWCで2カ月に一度開催されているワイン愛好家たちの「ワイン会コンペ」がレポートされている。BWC創設メンバーのひとり光岡甫さん（当時55歳、デザインステーションナリーの会社GCプレス代表取締役）が、使ったグラスを丁寧に磨きながら次のように語っている。

「ロッジを併設しているのでみんな泊りでやってきます。ここでは年や肩書にかかわらずメンバーであるというだけのフラットな関係。だからワインもカジュアルなものからスペシャルなものまで束縛なく気軽に楽しんでいます。」と。その日は「モダンスタイルのイタリアワイン」がテーマで「果実味が強くスターターには最適なコルバカラ・ソアベ・クラシコ・スペリオール‘00」など6種類が味見された。

メンバーズラウンジにはワイン会専用の棚がある。グラスは赤白兼用できるものが揃えられ、使ったグラスは自分で洗って戻すのがルールだ。スタート前にシェフに今日のワインの種類を説明し、あとはお任せするが、「新鮮な野菜はもちろん海も近いので海産物は豊富。シンプルで華美さはありませんが、都会では味わえない味と自負しています。」とシェフはいう。ゲストの手土産も紹介されているが「アニベルセルのチョコレート」（早川聡さん）「オーストラリア産からすみ」（石井千晶さん）などおしゃれだ。



「挙式・パーティーが増えているゴルフ場レストランでブライダルフェア」というタイトルでゴルフ場セミナー誌 2003 年 8 月号に 2 ページにわたって BWC が取り上げられた。

「これまでに 10 組のカップルが挙式しています。ブライダル雑誌にも紹介されていますし、ブライダルフェアを 2 回実施しています。」という BWC 事務局長篠本はるみさん言葉で始まる記事はウェディングフェアの様子を次のように書いている。

ウェディングドレスといっても、色、デザインと好みもそれぞれ。もちろん、試着もできる。装飾品、あるいは引き出物のサンプルも展示してある。パーティー会場でのテーブルセッティングも紹介していた。あらかじめ予約があれば、パーティー料理も試食できるようになっている。

そして「昨今では、結婚式も様変わりしているようで、世間では仲人を立てない挙式が増えているという。ゴルフ場での挙式も人気上昇中とも聞く。」と締めくくっている。

4. BWC の理念

「どんな困難があっても、他人には不可思議な行動に見えても一途に思いを貫く生き方がある。目的に向かって視線を真っ直ぐに据えた姿勢は、それこそシンプルで美しい。情熱に満ちた彼らの生き方の一端をご紹介します。」という前触れで坂さんを中心に BWC をゼロから創った人々を紹介しているのが「The シンプル Style」という雑誌で「既存のゴルフクラブのあり方と日本の現状に対してのアンチテーゼでもある」と評価している。

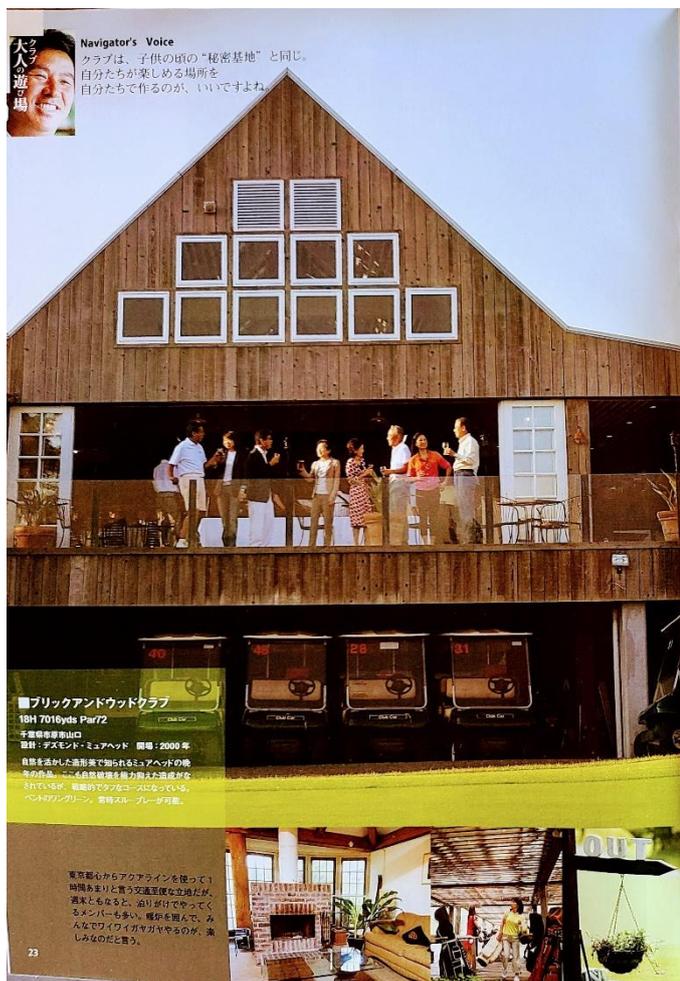
これまで「ミュアヘッド・フィールズの過去、現在、未来」で書いてきたことと重なる多くの部分は省くが、デズモンド・ミュアヘッド氏が設計に際して描いた各コースのイメージイラストからクラブハウスの様々な写真を何ページにもわたって掲載し、坂さんを「1944 年 1 月 15 日生まれ、東京都文京区出身。学習院大学政経学部卒業後 2 年間のサラリーマン生活を経て、家業である旅館を継ぐ。37 歳の時、4 カ月間アメリカに語学留学したのをきっかけに美しい国作りに目覚め、貸しビル業“栄和”を興し、現在に至る。」と紹介している。

「何回振られても懲りずにアタックしてしまう女性のように、何度もチャレンジしたくなる魅力あるコース」とし、「陽がとっぷり暮れても、歓談の声がやむことがない。(中略)メンバーにとっては何物にも代え難い明日への活力であると感じずにはいられなかった。」というベタ褒めに嬉しくなった。

坂さんは同誌に次のようなコメントを寄せている。「このクラブのスタンダードは、常に明るく生きられる人、他人の幸福と一緒に喜べる人、少しでも社会に貢献しようと頑張っている人たちが集まり、話せる憩いの場であるということです。周りは面白いゴルフク

ラブができたと言いますが、では面白いクラブって何だと根底を掘ってみると、「一致団結した心」にたどり着くんです。」「何事も、トップダウンでなく、メンバーひとりひとりが真剣に考えて意見を出し合って決定していく。それがクラブというものの本来のあり方ではないでしょうか。最後まで息切れしないようにするのは大変ですが、苦しみより成就させる楽しみのほうが大きいですね。」

同誌は坂さんが学生生活最後の春休み、一緒にスコットランドを旅した先輩から言われたひと言が今でも忘れられないとの話を紹介している。その言葉とは「人間は、自分が夢見た範囲までしか到達することができない。」というものであったという。



施設も運営も、手作り

かつて欧米のクラブはメンバーがお金を出し合い、自分たちの手で運営した。今の日本に、それと同じ発想で生まれ、運営されるクロースドのクラブがあった。

居心地のいいクラブで、素敵な仲間とクラブライフを謳歌したい。そんな思いを形に。

千葉県に、ゴルフ場のガイド本に載らない、ゴルフ専門誌にも紹介されない、そしてクオース道路沿いの家内看瓶もほんのりないプライベートクラブがある。まさにメンバーの「秘密基地」「隠れ家」的なクラブで、それだけで羨望を覚える。

そのブリック&ウッドクラブは、若い創設者たちの発案で誕生したクラブだ。1994年、彼らは本気で本気で、資金はすべて自分たちが理想とするクラブの設立に賛同する出資者1株主各自が移って集めた。メンバー集めは当時も今も口コミ。クラブ経営の理解者だけを誘ってきた。それに対し、当初業界の反応は「うまくいくわけがない」というものだった。

それでも彼らは、自分たちの居心地のいいクラブを実現するため、すべての施設を手作りで整えていった。その結果、例えばクラブハウスはアメリカの田舎風の小ぶりな木造に、しかし内部は職人に集められる、確かみに選られたメンバー同士が気軽に交際できるアウトホームなスペースとなった。運営ももちろん、たれが思ったように回らない。ゴルフは自分でバッグをぶらし、メンバーが集まったら、自分でカートに積んでスタートする。過度なサービスはない。ラウンジもレストランもロジも、ただ、居心地がいい。今もメンバーの、メンバーによる、メンバーのためのクラブづくりを日々進めている。

ブリック&ウッドクラブ

石井千晶氏（副理事長、イベント委員会委員長）
 「必要は自分たちで、自分たちが居心地のいいクラブを作ろうということなんです。クラブの語源には「宿（割り敷）」という意味があるんですが、まさにその精神、寛容し、誰と仲良く活動できる人にメンバーになってもらえればと思っています。そういう人には絶対に楽しいクラブだと思います」

BWCはゴルフ雑誌であるアルバやChoice、ゴルフフェスタなどにおいて「コースガイドブックに載らないゴルフクラブ」として有名になりつつあるとして様々に取り上げられ、日経など新聞やNHKにも紹介された。愉しむゴルフ臨時増刊号（2004年4月21日）ではBWCメンバーであるキャスター小倉智昭さんにインタビューしている。「平日にもやろうと思って、千葉県のブリック&ウッドクラブのメンバーになったのです。ここは朝の仕事が終わってアクアラインで行くと、11時半にはスタートできる。仕事を朝と夜になるべく固めるようにしています。こうして週に4回ぐらいして、夏休み、冬休みにはそれぞれ15ラ

ウンドぐらいやりますから、ラウンド数は年間 250 ぐらい。」「上達するには回数と集中力」という小倉さんはBWCの愛好者だった。

ゴルフダイジェスト 2004 年 6 月号は「ブリック&ウッドの不思議を追う 自分の居場所を見つけた人々」という特集を 8 ページ組んでいる。

「主人は 80 回、私は 100 回来ています (笑)。」という細田由美子さんは、レストラン棟の入り口のソファに夫婦と娘夫妻の 4 人で座り、満面の笑みを浮かべている。

「私たちはここで結ばれました。」というのは歯科医の原元信貴さんと、やはり歯科医のタマミさん。同業で、しかも趣味がゴルフということで意気投合し、ブリック&ウッドクラブでデートを重ね、めでたくゴルフ場のチャペルで結婚式を挙げたという。チャペルの中で仲良く手をつないだ写真が輝いて見える。

主婦の石井ドリスさんは 2002 年のクラブチャンピオン。「グリーンに乗ったからって、ここでは安心できません。アプローチのやり直しなんてしょっちゅうです。」とクラブハウスの手前の練習グリーンでパターを手に、にこやかな笑顔だ。

理学療養士富松利幸さんと健康会社マネージャー平岩成人さんは午前中ラウンドして午後からは不定期だがクラブハウス内の一室に治療室を開設して、ゴルファーたちの疲れを癒してくれている。

ワイン会で紹介した光岡甫さんは大の犬好き。モカ (ミニチュアシュナウザー) とコッペ (ワイヤーヘアのダックスフント) を連れてブリックに来る。ラウンド中は 2 匹ともテラスでお留守番。プレーが終わったらモカとコッペのお散歩タイム。リードを付けてカートに乗せてプレーする人も多い。グリーンやバンカーには入れない、フンの処理はするなどのルールを守ればワンちゃん同伴ラウンドが許されているゴルフ場はBWCくらいかもしれない。

記事には以下のような記載があった。

フロントの方に向かうと、雑種のワンちゃんが、人なつっこそうにお出迎えしてくれた。なんだ? しかも鎖で繋がれてない。放し飼いだ。頭をなでると、喜んでいた。この犬は見知らぬゲストに慣れている。小次郎という昔から住んでいた野犬なのだそう。それが飼われてコースのマスコットになった。テラスの方に歩いて行くと、今度は小型犬が寝そべっていた。犬同伴オーケイのゴルフ場なのだ。プレー中は犬舎があり、そこで預かってくれるという。レストランはダメだが、テラスなら、犬と一緒に食事ができる。犬好きの私 (筆者注: アマチュアの木村和久さんでこの熱中レポートの筆者) にとっては、ちょっといいんじゃないかと思う。

小次郎が亡くなった時はメンバーが盛大な葬儀を行った。1 番ホール脇の小高い場所に

名前などを彫ったプレートを埋め、お墓を作って弔った光景を見たある方は「僕が天に召された時も小次郎並みに参列者が集まるかな。」とうらやましがった。

次のBWCのマスコット犬はコタローと名付けられた。3代目はマルと呼ばれる黒い犬だ。マルはもう老犬で、ラウンジに行く階段の上か、暑い日には男子ロッカールームの涼しい場所で寝ていることが多い。「キャディーさんでなく、ワンちゃんが出迎えてくれるゴルフ場」としてもBWCは知られている。

5. 競技者たち

スコットランドのゴルフ場であるカーヌスティがお気に入りの銀行員坂東法隆さんは「雰囲気がどことなく似ていた。」のでメンバーになった。表参道で小料理屋を営む毛利久美子さん・奈津美さん母娘は、BWCに来るたびにクラブの車寄せの棚に並べられている地元の古茶幹夫さんが作った取れたての野菜を買って帰る。自営業の小泉烈司さんは「ラウンド後は、ゆっくりお風呂に入って暖炉の前で焼酎を傾けるのが一番の幸せ。」で、BWCの夜は長い。

アルバの2007年6月28日号は、BWCの月例競技会の場で、関東クラブ対抗出場メンバーの8人を取材している。「素ダボを叩かないラウンド中の知恵」と題して、上手な人の心構えなどを紹介する凝った内容で、BWCの紹介記事も手が込んできた。

ハンデ4・8の水田文生さんの朝イチショットはスマイルショット。「まず笑顔をつくると、自然に力みがとれて、ゆったりとクラブが振れます。」という。マン振りには禁物なのだ。ハンデ9・9の竹下隆史さんは残り120ヤードのクラブ選択はライをよく見てから番手を選ぶ。たとえば、芝のないベアグラウンドでは、8番アイアンでスリークォーターのパンチショット。ラフなら、ピッチングウェッジでコックを強めにして、ラフに負けないように打つという。「いずれにしても、ボールを前に運ぶことが、素ダボを叩かないヒケツだ」そうだ。

ハンデ4・8の品部祐児さんは、狭いホールではたとえパー5でもドライバーを捨ててスプーン、あるいはクリークを持ってゆったりと振る。フェアウェーが狭いと真っすぐ飛ばしたいと思い、体が萎縮してしまい、左右にボールが散らばり、次のショットが打ちにくい確率が高まるからだ。

ハンデ7・1の相原信太さんは、アゴが高いフェアウェーバンカーやバンカーのライの悪いところにボールが入ってしまったら、アゴの低い横方向に脱出させる。「1打損しても前に出そうとして大叩きするより格段にマシ。」という。「損して得を取れ。」だ。

ハンデ8・5の犬塚秀博さんは、グリーンをオーバーして奥のラフに入った難しいアプローチでは「深くてボールが埋まっている状態なら、ロブショットで脱出させます。

でもそれは最後の手段。ここで怖いのはトップしてホームランすること。素ダボを防ぐには、ピッチ&ランが一番の安全策なんです。」という。とにかく確実にグリーンに乗せることに集中するのが良いそうだ。

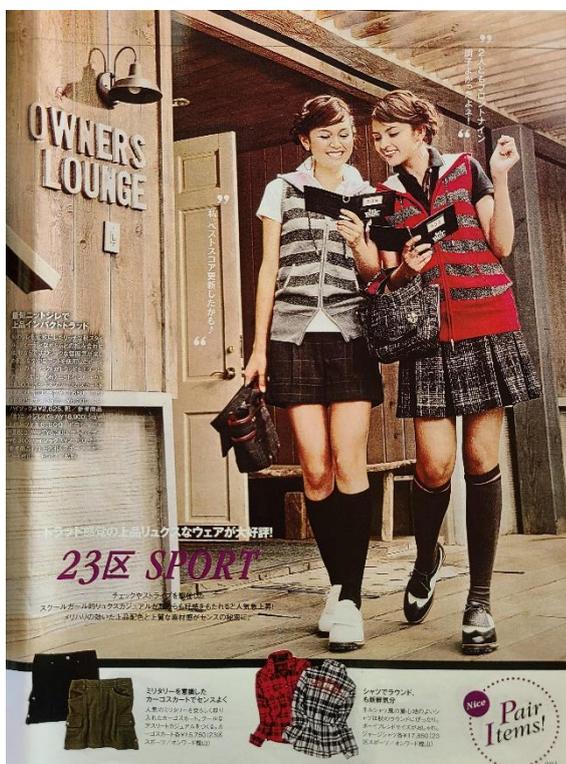
ハンデ4・7の菊池正彦さんは、エッジで止まったボールをSWで上げてピタッと止めようとしな。AWやPW、9Iを使って、パッティングと同じ要領でコロがす。「カップに入る確率が上げるよりも高い。」という。

ハンデ3・2の桐生峰男さんは、「下りのパットだからといって決してビビらないことですね。私の場合、少しオーバーしてもいいと思って打ちます。オーバーしたほうが上りになるし、返しのラインも分かる。」とパットの名手といわれる秘訣を開陳した。

ハンデ8・9の上野伊澄さんは、10メートルのロングパットなら5メートルの中間地点で素振り3回を勧める。「中間地点での素振りの2倍のタッチで打つようにすると、そこそこ寄るものです」という。

難しいコースといわれるブリックのシングルハンデのゴルファーはそれぞれ様々な工夫と考えでプレーしていた。

6. ファッション誌の舞台として



ところで 2007 年くらいからBWCは女性ゴルファー対象のファッション雑誌の撮影場所に選ばれることが増え、それは今に続いている。レンガと木で造られたクラブハウスの雰囲気やデズモンド・ミュアヘッド氏の特徴的なコースデザインが、素敵なゴルフの装いをしたモデル嬢たちのスタイル抜群のポーズを映えさせるためと思われる。ANECAN2007年6月号の別冊付録はなんと13ページにわたってBWCで撮影したファッションを紹介している。上は帽子から下はソックス・ゴルフシューズまで、思わず見とれる美しい姿のモデル嬢のオンパレードだ。

J J AUGUST号(2007年)は6ページにわたって「ゴルフウェア、これなら着たい！」をBWCで撮影し特集している。「グリーンの上でも一目置かれるトレンドをおさえたウェア」とか「モノトーンならシャープな女らしさ」、「今年流行のマリン配色

できちんと感」「やっぱり可愛いピンクならグリーンの華になること間違いなし」など、な

ほどの納得ファッションが提示され、ゴルフには装いも大事なことを教えてくれる。

レジーナ冬号（2007年11月21日）はゴルフというスポーツが特に女性の場合、ファッションと密接な関係があることを4ページ特集で教えてくれている。「ドレスコードを決めて、みんなで楽しくラウンド」というメッセージは、広々とし緑豊かなBWCならではと思えるし、そんなスポーツはゴルフくらいだろう。



7. アンチテーゼ

では次に硬派な評論家でありBWCメンバーの大宅映子さんの日本経済新聞2008年2月18日付けのインタビュー記事のさわりを紹介しよう。まず、大宅さんは公務員倫理法について「倫理規定に、利害関係者との禁止行為として金銭・物品・不動産の贈与などと並んでわざわざゴルフと記されています。あれは削除してもらいたいと思います。スポーツの中で、どうしてゴルフだけが目の敵にされるのでしょうか。ゴルフ場利用税にしても、法律なんだから課税理由を明確にしてほしいですね。」と怒る。

大宅さんは日本のゴルフが「緑の待合」と名付けられたように接待ゴルフといういびつな形で広がったことを指摘し、ゴルフに罪はないのに汚職や不祥事とセットで扱われたことに憤慨。「だいたい会員権という発想がおかしいでしょう。単なるプレー権が利殖に使われるなんて。豪華なクラブハウスに、あり余るロッカー……世界中どこにもありません。なぜあんなにハードウェアにお金をかけるのでしょうか。大切なのは運用や利用のしかたなのに、日本人は本当にハコ好きですね。接待で会社持ちが多かったから、なるべくお金を使わせるように妙なシステムができあがっています。」と辛口コメントだ。

大宅さんはBWCで良く姿を見かけた。「ゴルフは練習したからといって、なかなか上達はしません。この理不尽さが面白いのです。全てが自己責任で、誰のせいにもできません。日本人に足りないメンタリティーの養成、修練の場になると思います。」とインタビューを締めくくった。

さてBWCのメディア露出はまだまだ山のようにある。それだけ従来の日本のゴルフ場がないものが注目されているのだろうが、この辺でミュアヘッド氏の住宅と一体型のゴルフ場という考えを実現した隣地の土太郎村開発がどのようにメディアに取り上げられたか10本目の「ミュアヘッド・フィールズの過去、現在、未来」でまとめたいと思う。

